
INSANITY

咲魔@テラ駆け出しドンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INSANITY

【Nコード】

N1904Z

【作者名】

咲魔@テラ駆け出しドンだー

【あらすじ】

とある世界からふたたび帰ってきた青年の笑いあり恋愛ありはたまたシリアスありの日常！

さて、彼にはどんな運命が待っているのか！！

ゆっくりまったりとお送りする咲魔初の一次小説です！！

ブログなんて無かった（前書き）

あい、初の一次小説です…楽しんでくださいーい（＾－＾）／

ブローグなんて無かった

秋吉夜哉は今年で五十歳になるのだが、外見は二十歳の時となんら変わってはいなかった。それは、三十年前、彼は妖怪となったからだ。

しかし、今こうして又しても現代社会に溶け込んでひっそりと、またまったりと人間の側でくらしている。

彼は、戸籍上では死人の扱いである。彼がとある世界に旅立った時、既に行方不明とされ、三十年間発見されず、死んでいるとされたのはつい最近、気まぐれで死亡の偽装をしたからだ。

そういえば、彼が現世に舞い降りたのはおとといの事である。前の世界が、とても清んだ空気が駆け巡っていたので、帰ってきた時は若干噎せた。やはり、科学技術の発達と大気汚染の関係は比例の関係にあるのだろうか。そう思わずにはいられないのである。

彼は今、ゲームセンターに居る。なんのことはない、長年の友人（だと彼は思っている。）が好んで飲んでいたビールを傾けながら、久々のゲームセンターの感覚に酔いしれていたのだ。

代金はどうするのかと思うだろうが、彼は行動が早い。先生という職業に着きたかったが、長年の勉強不足（といっても、頭の良さは健在だが。）と、自身の妖怪化に伴い、それを切り捨て、取り敢えずコンビニエンスストアでアルバイトをすることにした。

彼は、ダンスダンスレボリューションなる音ゲーをしている。まあ、知る人ぞ知る音ゲーであるのだが。

今のコインで本日五回目になる。

なかなかこのゲームセンターはダンスダンスレボリューションの人氣は高く、人が何人か並ぶのだが、並んでるときはビールを飲んでいる。何故か酒臭くならないのは不思議である。

さて、四曲目も終了し、時計を見た。

「やべ。バイトの時間ちけえ。」

ダッシュでゲームセンターを抜ける。この時間帯は、人が多いのだが、かなりの速度で走ってるにも関わらず、誰一人として接触はしていない。

「あー、やべえやべえ。」

余裕の表情で、その言葉はおかしいと思うが、それはおいといて、ゲームセンターからバイト先までは一キロで、残り時間一分五秒。

「さて、行きますか。」

歩道を駆け抜ける。都会の歩道は、道の幅が広いが、人が多いのだ。スピードを落とさずに、なんなく駆け抜ける。これだけのスピードで走ってるにも関わらず、誰も感心を寄せないのは、彼が認識阻害魔術を展開しているからである。

「はい、到着。」

五秒の余り。といっても、シフトの五分前であるが。

「こんにちは。シフト交替ですよ。」

「あ、ありがとね秋吉君。」

女子のバイト仲間とシフトを交替し、制服に着替える。流石に着ていた真っ赤の大きなフードつきパーカーはおかしい。

因みに、彼は結構お客さんから好かれる。

というのも、彼は童顔で、男だが、女子みたいな…へたな女子より可愛らしい顔立ちをしているからである。日頃はコンプレックスの源であるので、フードを深々と被っているのだが。

「いらっしやいませ。」

コンビニに、女子高生二人。俺を見るなりひそひそ話を始めた。だから嫌なんだ…。女顔でアルトの声で中身は男。おかしいだろう…。

まあ、営業スマイルは崩さんけどな。なんやかんやで、俺も役にたってるわけだし。

さて、彼がレジ打ちを始めて五時間が経過し、もうすぐシフトの時間が終わるくらいの時間のことだった。なんか、いかにも怪しそうな真っ黒いコートに、サングラス、マスクを着けた中年男性が入ってきた。見るからに怪しい。よくみたら、銃をポケットにしまっている。

でも、この手の輩は刺激し過ぎると、かえって危険だ。興奮して銃を乱射しかねないからな。

「おいお前ら、手をあげろ。さもないと撃つぞ…!」

男は行動にでたようだ。

よく見ると、瞳孔が開いて血迷った眼をしている。恐らく薬物中毒者の末期だろう。めんどろだ…。

「おい、その女！！金を持ってこい！！」

はて、女は居ないんだが…。

「お前だよお前！！さつさとしゃがれノロマ！！」

……どうやら、俺のようだ。穏便にいく作戦変更。ボコる。

「お、お？やんのか女ア！！銃だぞコラア！！」

「…中年は黙ってるよ。」

「ああ！？マジで撃つぞコラア！！」

カウンターを越えて、男との距離二メートルといったところか。

「秋吉君！！下がちなさい！！」

店長の制止も俺には聞こえない。

男の指が引き金にかかると同時に地面を蹴り、鳩尾に蹴りを入れる。かなり手加減したので一メートルしか飛ばなかった。

「おい、俺が女に見えるかコラ。」

「どけよクソツ！！ヤクが切れてんだよ！！離せ畜生！！」

かなり息が荒い上に、薬物の匂いがする…。

不意に、嫌な予感がして、後ろに飛び退くと同時に、爆音が炸裂。

そして、銃弾が俺が居たところを通りすぎた。

速度は普通の拳銃程度だったが、油断していた。二人組だったか……。片方は、腹を押さえて立ち上がり、拳銃を俺に向けた。もう一人は、客を人質にとっている。

渋々と手をあげて下がった。

やろうと思えば、人質の解放と、二人相手の立ち回りくらいは楽勝なのだが、如何せん現代社会では不可能と思われる行動をとることになるから、俺が色んな意味で怪しまれる。

「へへへ…これでデメエも手を出せないな。」

「……邪魔。」

いきなり人質を持った方の男が吹き飛ばされた。

「加減間違えた。」

「おい、注目集めてどうする。」

……嫌な予感がするのは俺だけだろうか。どうも、聞いたことある声が二つ聞こえた気がしたのは…。

「あー、すみません。肉まんを三……。夜哉！？えっ…えっ!？」

「あ、夜哉だ。二日ぶりー。」

……間違いないな。

いや、幻聴の可能性がある。無視しよう。

「肉まん三個でお会計は750円になります。」

「無視すんな阿呆。」

「……幻聴。」

「咲魔、殴っていいか？」

「ふえ！？えつと…あー。ゴホン。良いわよ。」

良いのかよ…。

今で確信したので紹介するが、肉まんを頼んだ方は宇津宮咲魔。片方は、宇津宮シキ…と名乗ってたな。今もそれで通してるだろう。確信は無いが。

ふと、視点を移動すると、男二人は気絶しているようだ。

「店長、すみません。あの男二人に救急車と警察お願いします。」

「え、ああ、うん。わかったよ。」

おお、なんか店長パシってるみたいだ。

「秋吉君はもうあがっていいよ。疲れただろうしね。」

「あ、ありがとうございます。」

時給もしっかりといただいて、カウンターを出た。

あ、店長？え？廃棄の弁当くれるの？ありがとう。

「で、なんでお前らが居るんだ？」

本日一番の不思議である。

「きつ…気まぐれよ気まぐれ！ねえ、シキー！」

「えっ？あ、うんうん。そうそう。気まぐれ。」

なんだ、気まぐれか。わざわざ結界を越えてご苦労なこつた。……
ん？そういえば、違和感があると思ったら…。

「二人とも背伸びたか？」

「まつ…まあ、ね。ちょっとね。」

「変…か？」

変というより、大人びたなと俺は思う。咲魔も髪を下ろしてるし。

「いや、悪くないぜ。」

二人がホッとしたのは言うまでもないのだが。

「お前ら、家はどこなんだ？」

「すぐ近くのアパート。」

すぐ近くのアパートって…俺んちもすぐ近くのアパートだし…アパ

「ト一つしかないし…。
まかさな…。」

さて、なんやかんやですぐ近くのアパートに着いた。当然二人も着いてきた。

階段を上がる。着いてくる曲がる。着いてくる。扉を開ける。隣の扉を開ける。

「……お隣さん？」

「マジかよ…まあ、夜哉ん家に遊び行きやすいからいいけどな。」

逃げ出したい気分ドアを閉める。

取り敢えず寛ごうと、ベッドにダイブ。

ガチャ…ガチャガチャ……カチャン。

ん？今、扉が開いた音が…。

「やつほー！！」

「ほぐおっ！！」

背中に鈍痛が走り、変な声を上げてしまった。

この声も聞いたことあるぞ…。いや、鮮明に覚えている。

「そ…穹。おま…。」

「あれ？夜君どこか痛いのか？お姉さんが看病してあげようか？」

「なにがお姉さんじゃー！俺が年上だ！」

「もう、夜君の意地っ張り。」

水無穹。元は人間だが、二十歳で妖怪になる。元と言えば、俺が気まぐれで助けた村娘的な奴なんだが…。どうしてこう、なつくかね…。因みに大人になって、胸ばかりデカくなりやがったし、シヨートヘアにしてから若干大人びた。なので、何故か年上の俺を可愛がる。因みに俺が妖怪になったのはギリギリ十九だ。

「うふふ。夜君かわいいー。」

なんなんだこいつは…。俺が痛さでもがいてる上から覆い被さるようになかつこうである。端から見たら俺が押し倒されてる風だ。しかもこいつ、風呂上がりなのか、熱いくらいである。ん？こいつ…まさか…。

「下着じゃねえかー！」

「あは、今さら気づいたってもう遅い。」

そう、下着なのだ。まさかのブラとパンツのみ。しかも裸足。

「かーえーれー！」

「いーやーだー！」

なにが嫌だか…。俺的には…その…素肌を当てられるところ…理性つてもんが危険に晒されるんだが…。

「「穹あああつー!!」」

俺の家のドアが盛大に吹っ飛ぶ午後七時。ドアの修理どうすっかな…。

「あー、咲魔とシキだー。」

「あーじゃないわよ!!は…早く退きなさい!そして、服を着なさい!!」

「着てるじゃん!!」

「パンツは服じゃねえ。常識的に。」

うむ、巨乳が頭に押し付けられかつ素肌が引っ付く俺にしてはなかなか冷静なコメントだな。

「パンツじゃないから恥ずかしくないもん!!」

「パンツだろJK。」

シキ、いい突っ込みだ。

「と…とにかく穹は夜哉から退きなさい…。」

「えー、やだー。夜君のお嫁さんは私なのー。」

「俺は痴女と結婚する趣味はねえよ…。」

やっこのことで穹のホールドから抜け出せた。

はあ、前途多難だな…。

ブログなんて無かった（後書き）

わけのわからない日常となりましたが…まあ、後々展開していきま
す。

不定期更新は気にしないでくださいーいー！
これからも宜しくお願いしますー！！

職業：魔装探偵！？（前書き）

はい、文章すくないWWW

職業：魔装探偵！？

夜哉 side

午後七時。女子（約一名）の痛め付けとも思える過度のスキンシップのお陰で肉体的にも精神的にも過大なダメージを負った俺は、取り敢えず英気を養う為にゲームセンターに向かうことにした。家の近くにゲームセンターがあるので、結構快適である。まあ、距離はどうにでもなるがな。

そういえばと、宝くじが当たっていたのを思い出して、五百万円を無駄無く稼いでいた。噂では、数学者は、宝くじの当たる確率は、分母が余りに大きすぎるので、当たる確率が二倍になったとか聞いたも当たる確率が天文学的数字なので買わないらしい。ちょっとした豆知識。

ここで、毎度毎度宝くじを買っている俗に言う、宝くじユーザーの皆様には心からお詫び申し上げたいのだが、実はちょっとした解析をして居たのだ。どこの宝くじで、何番目に引きにいくと当たるかを解析した結果だ。

まあ、チートだな。

つつ訳で、やたら所持金が多い。

なんだかんだ歩いて十分程度でゲームセンターに到着。閉店は十一時だから長居はできないな…。

ふと、眼をやるとこの時間には珍しく、人が多かった。なんでも、格闘ゲームに人だかりができてる。

それも、片側のみ。

片側はよく見えないが、人が座っている。

画面を注視する。今座席に座ったインドア系の男が乱入した。

そこからは、ある意味リンチだった。

コンボが途切れないのだ。俺は結構このゲームをやるのだが、こんなにコンボを続けるのは至難の業だ。仕様として、コンボが十を越えた辺りからボタンを押すタイミングが若干小さくなるし、上級者でも動きがカクカクになる程操作が難しい。画面のキャラクターは、着地の隙を攻撃でカバーしたり、攻撃の隙を回避でカバーしたりと、動きに無駄がなくなめらかである。

ハッキリ言おう。やりこみ過ぎだろ。

こんな動き出来るのは正直俺だけだと思っていた。

ちようどダチヨウ倶楽部のように変な譲り合いが始まったので、俺がプレイするのは容易であった。

「おもしろい。連勝記録を破ってやろうじゃないか。」

キャラクターを選択する。いつもどおり、ナイフ使いの男。対して、相手は巨大な大剣を持った女。

まもなくバトルが始まった。

開始と同時にダッシュで接近される。

俺は動かずに接近を待つ。

予想道理、緊急回避で後ろに回った相手は、大剣を薙ぎ払った。絶妙なタイミングでしゃがみ、そのまま上に攻撃を入れる。しかし、そこには既に居なく、技の出の早い蹴りを出してきた。システムの回避は不可能なので、素直に受け、回数制限のある、ボムと言う範囲攻撃で技の出を潰すと、よろめいてる間にナイフの連続攻撃を入れる。二十コンボ繋がると、絶妙なタイミングで抜け出される。

そこからは、まるで巨剣を携える重量級とは思えないようなめらかな動きで俺を翻弄する。

俺は最大の反射神経を集中させて腕を動かすが、あることが起きた。

「なっ！？処理落ちいいい！？」

俺のキャラがバグって動けない間になんと連続四十コンボを鮮やかに決め、決着がついた。

周囲がどよめいた。そりやそうだな。人間にゲームを処理落ちさせる程の速度はだせねえしな。

「ふいー。やつば夜哉は強いね。」

なぬ…。聞いたことある声…てか、あいつだろ。

「なんで居るんだよシキ。」

「いやー、ゲーセンは好きだからねえ。まあいいや。一緒に回ろうよ！ー！」

「ちよっ！！何故手を引く何故！？」

「いーじゃんいーじゃん！！あ…嫌……かな。」

「いつ…いや、別に嫌じゃないが…。」

俺には嫌だと言うことは不可能だ。考えてみる、背の小さい女の子が上目遣いで俺を見てるんだぞ…あれ狙ってんのかな…。関係ないか。

「なあ夜哉、太鼓やろっ！！」

「おう。いいぜ。」

そういえば、先程から視線が…。嫉妬と羨望の眼差しを感じる。チ
ラリと振り返ると、男どもが鼻の下を伸ばして食い入るように見て
いた。

嫉妬つつつても、俺たちは友達同士な訳で、決してカップルではな
いぞ。

男どもは、太鼓を叩く度に揺れるシキの胸を見ているのだ。それを見
ている女子からの卑下するような視線が注がれているのだが。

さて、太鼓も終わって、UFOキャッチャーでもしようかと言うと
ころで、ヤンキーみたいな男（所謂DQNというやつだ）が近づい
て、話しかけてきた。

「ねえねえ君たちさ、俺と遊んで行かねえ？」

さて、シキがナンパされました…ん？君たち？
俺も入ってんの？まさか…な。

「あ…あはは。お兄さんそれ爆弾投下。」

「え？お嬢ちゃん達遊ばない？」

「お兄さん命は大事にね…。」

「へ？」

怒りは頂点に達した。今こそ狩る頃合いか。

「……俺は男だ。」

赤の目…妖怪の目になる。普段は苦労した末、黒の目になれるようになった。

赤の光る目を直視した男は恐怖で足がガタガタと震え始める。

「は……はひっ!!」

目を黒に変化させる。

「まあ、ナンパする相手は選べよ。」

「す……すみませんでした!!」

すたこらさつさと逃げるように去っていった。

まあ、あの程度ならそこまでキレないわな。今のは脅し程度だし。

というか、俺が仮に女子だとしても、女子二人同時にナンパとは、
どれだけ欲求不満なんだろう…。考えちゃ駄目か。

UFOキャッチャーは苦手なんだ…取り方がわからない。いい感じ
にはまってもアームがゆるゆるだからすぐ取り落とすんだよ。

結局俺は下手すぎて何も取れなかったが、シキは大きなぬいぐるみ
を取っていた…五百円で。

んで、もちろん俺が荷物持ちな訳である。

景品が大きすぎたので、このままゲームをし続けるのもアレなので、

帰ることにした。

とくにどうという事もなく帰宅。

ガチャリ

「お帰りなさい！！私にします？私にします？それともわ・た・し？」

ボタン

ガチャリ

「お帰りなさい私に（ry」

ボタン

俺は見てはいけないものを見てしまったようだ。

「いやん、夜君のいけずー！」

ツッコミ所は満載である。

まずは、……。

「選択肢が無い。」

「一個だけあるよ？」

一個だけなんざ選択肢に入らん。

「遊んでないで入ってきて夜哉。」

咲魔すら勝手に家に上がる始末である。鍵は掛けたはずなんだがな。仕方なく穹のハグを回避して入っていくと、後ろからシキが、先ほど取った巨大なぬいぐるみを抱えてきた。

「で、状況説明するんだけど…。」

おお、なんて優しい。今まさに俺が聞きたいことが状況説明なんだ。でも、その前に。

「穹、下着は止めようぜ？」

「着てるよ。」

薄手のカッターシャツだけな。それじゃあブラは隠しきれてないというか、見せる気満々だろう。透けて見えるし。てか、ズボン穿いてないのが一番の問題だろう。

「うー穿けばいいんでしょー。夜君のバーカ。」

そして、穿いたのはズボンではなくどこからともなく出したミニスカート。残念ながら隠そうとしていないのでパンチラどころかパンモロである。

ゴホンと一つ咳払いをして咲魔が切り出した。

「えっと、只単に、大神から飛ばされたのが現代だったから、ここに居る訳だけど。大神の命じによって。仕事をするようになったの。」

」

「仕事？俺はバイトやってんだけど。」

「魔装探偵。夜君には悪いけどバイト止めてもらわないと。いけな
いよね。」

「そう。悪いけど、大神には逆らえないから。シャルと朝儀は今仕
事のはず。」

「で、仕事内容は？」

「普通の探偵と変わりなかったりするけど、怪奇現象を止めたり、
妖怪の討伐とかも入るわね。」

う…確かに大変そうだな…。バイト辞めないとどうしようもないぞ
…。店長に謝らないと…。

あーあー。俺の平凡はどこへやら…。

「またこの剣で戦えと？」

「無理強いはしない…でも、手伝ってほしい。」

「仕方ないな…店長に謝っとくか…。」

三人の顔がパツと明るくなる。俺が居るだけでみんな明るくなれる
んなら、俺だって一肌脱ごうじゃないか。まあ、無理なもんは無理
だけだな。

「で、朝儀とシャルはどんな仕事なんだ？」

「あー、なんでも、とある鏡がいきなりなにもしてないのに勢いよく割れたらしい。不自然過ぎて怖いから依頼されたわけよ。まあ、大体そんなもんよ。」

鏡が勝手に割れる……。別に身に覚えがあるわけではないが、なんだろうこの悪寒は。

職業：魔装探偵！？（後書き）

鏡が勝手に割れる…まあ、ネタですよね。
ん？何のネタかって？…。

次回からは、オンドウル侍さんとのコラボで、オリジナルキャラ、アレンが登場します！！

キャラクター紹介（前書き）

はい、キャラクター紹介です。 は最大で五つ、最低で一つです。
不備な点があれば言うてください。 シキがお応えいたします。

キャラクター紹介

名前：秋吉夜哉あきよしよるや

性別：男

能力：反射と向きを操る能力

武器：赤桜・式式【片手剣】せきおう・にしき

特技：反射神経、数学全般

趣味：ゲームセンターに籠ること、フラリと出歩くこと

好き：空気が旨い場所

嫌い：女顔のことにふれるやつ

危険度：

友好度：

概要：本作の主人公。誰に対しても友好的で、社交性に優れるが、色恋沙汰に関してはかなり鈍感。だがモテる。何故かモテる。

容姿は、人間から妖怪になったため19歳から変わっておらず、さらに女顔である。パツと見は女子にしか見えない容貌は、本人はかなりのコンプレックスのようで、いつも紅いパーカーの大きなフードを深々と被っている。

だが、黒のやや長めの艶やかな髪は時として凛々しさを醸し出す。

普段は、赤い目を、魔術で黒に見せている。

人間の時は、数学の教師を志していたが、妖怪化に伴い、夢を諦めるが、実際本人はどうとも思っていないようだ。

能力については、主に向きを操る力を使い、反射の能力は、『全反射の籠手』という武器を呼び出し、装着すると使えるようになる。

触れると、あらゆる攻撃や、魔法や、呪術。その他さまざまなものを反射させる武具である。

対策法としては、まあ人間に対してかなり友好的なので対策はとる必要はないが、怒らせたら大変である。怒らせる方法…書くのもどうかと思うが、仲間意識が強く、仲間を馬鹿にされるのを嫌うため、まあお分かりだろう。怒らせたら殺されるだろうな、精神的に。その時は危険度が高くなるので注意。

名前：宇都宮咲魔^{うつのみやさくま}

性別：女

能力：無限の創造世界 固有結界

武器：刈り取る死痛の二つ鎌【双鎌】^{かりとるしつうのふたつがま}

特技：武術全般

趣味：戦闘、料理、運動

好き：夜哉

嫌い：夜哉にあだなす全ての存在、大神

危険度：

友好度：

概要：転生してもうた！！シリーズの主人公。夜哉とは違ってかわって社交性が高くない。語尾が「わ。」とか「ね。」になっている。元は、ロリータサイズの少女の姿だったが、大神を脅かす大神にお願いしたら運良く20歳くらいの身長にもらったので髪をポニーテールをとっている。

革新者という位置付けで、進化した人類である。能力を使うときや、怒ったときは黒の瞳が光輝く黄金に変わる。そして、身体能力が上昇する。

危険度が高いのは、若干戦闘好きで、武器はどこかしら持ち歩いている。（持ち歩いていなくても創造できる。）なので、喧嘩を吹っ掛けたら、人間だと半殺し、妖怪だと9割殺し、死徒だと殲滅する。くれぐれも怒らせてはいけない。地球そのものがどうなるかしれない。幸いそこまで沸点は低くないというか結構高い。

髪は黒で、赤の小さなリボンを左右に二つ着けている。目は黒。因みに胸はそこそこデカい。

能力、《無限の創造世界》は、固有結界というそれだけに特化した魔術回路であって、世界を塗り潰すことができる。

無限の創造世界と言うものは、簡単に言うと自作爆弾の無限倉庫である。

物理的なものが空想が現実になる能力で、敵を殲滅するために剣をばらまいたり、小腹を満たすために菓子を出したりと使用用途はさまざまである。

また、能力を使わずとも、大抵の魔術が使える。

対策法としては、まず怒らせてはいけない。絶対にだ。もしキレさせることがあるものなら、自分の周りに大量の剣が現れ、ジ・エンドである。

名前：シャルロッテ・フラァ

性別：女

能力：なし 魔術は使える。

武器：銃器全般

特技：超遠距離狙撃

趣味：夜哉の背中を遠距離からスナイパーのスコープで眺めること。

好き：夜哉、銃器

嫌い：弾詰まり

危険度：

友好度：

概要：言わずともがな二人目のヒロイン。夜哉に惚れている。真面目な性格だが、生真面目という訳でもなく、社交性に優れ、誰に対しても敬語であるが、仲間内では名前は呼び捨てにしている。

外見年齢は17歳くらい。髪は金色のウェーブがかった長髪に、栗色の瞳を持つ。

因みに胸は小さくはない。

随分前から咲魔と行動を共にしていて、盛大にボケるチームの良心としても活躍。

能力はないが、魔術が使える。しかし、卓越した狙撃センスで、遠距離からの精密狙撃は、幾度も活躍している。さらに、属性魔術で弾丸に属性を付加することも可能である。

体力的には、高いものの他のパーティメンバーには見劣りする。

対策法は、取り敢えず敵に回したら厄介である。視認不能の距離からの精密射撃は狙われる方にとってはかなりの神経を磨り減らして回避に徹してもギリギリ急所から逸れる程度であるから、敵に回すのは危険である。しかし、友好的で基本的に喧嘩はしないので安心である。

名前：水無穹 みずなしそら

性別：女

能力：幻惑能力

武器：素手

特技：家事全般

趣味：ショッピング

好き：夜哉

嫌い：勉強

危険度：

友好度：

概要：三人目のヒロイン。夜哉に対してド変態。どうしてこうなった…。

まあ、本人としてはスキンシップなだけなんだろうが。過度すぎる。その強さイコール夜哉の好きさと考えれば納得はいくだろう。気づかない夜哉も夜哉である。

容姿は、空色のショートヘアに、随一のスタイルと、少女の子だと嫉妬してしまう体型である。胸は適度にデカイ。

さらに、20歳から妖怪かしたため永遠の20歳である。羨ましい。因みに、妖怪化に伴い黒の長髪から空色のショートに変化したのである。眼の色は緋色。

夜哉に対してお姉さんの態度をとっている。確かに外見的に丁度良いが…。因みに、夜哉のことを「夜君」と呼ぶ。

能力に関しては、幻惑能力である。幻覚を魅せたり、幻を出したりと、使い勝手が難しいが強力な能力である。最近は夜哉にばかり使っている。効果は媚薬と同じ。しかし、使う度に跳ね返されている。迷惑なだけである。

結局、能力は戦闘に余り用いない。体術での攻撃を主にするが、威力は高いのは仲間内で体術ができる（シャル以外）に教えてもらい、天才的で驚異的なスピードで習得していき、体術は随一の強さになるまでに成長。

対策法としては、近寄らないのが賢明だろう。ある程度の剣の達人が真剣を持って勝負を挑んだとしても惑わされて終わりが体術で完膚なきまでに打ちのめされるだけだ。

刺激さえしなければ安全なので、普通にそっとしておこう。余程不機嫌でなければ襲ってこないはずだ。襲ってきても、お団子奢ってあげると言えば大抵機嫌をなおす。

名前：秋吉朝儀 あきよしあさき

性別：女

能力：体感重力を操る能力

武器：紅球（じしゅう）【武器ユニット】

特技：料理、運動

趣味：散歩、ジョギング

好き：夜哉

嫌い：取り敢えずヌルヌルしたもの全般

危険度：

友好度：

概要：四人目のヒロイン。夜哉の妹ではなく、夜哉そのものの裏の存在。戦闘時には残虐性を発揮し、咲魔とタメを張れるだろう。容姿は、紅色の髪で髪型はおさげにしている。目は赤色。胸は…触れてはいけない。

平常時は、先程記した通り友好的であるが、戦闘時に危険度になる。ので注意が必要である。能力について、体感重力というのは、自分にかかる重力のことで、地球から受ける重力を無理矢理引き剥がして、方向を自由自在に変えることができる。

例えば、真横に壁があったとする。それに向かって重力の向きを動かせば、壁に立つことができる。と言うものだ。

武器ユニットの紅球というものは、元は半径10？程度の真紅の球

であるが、念じて魔力を通すと、形状を変化させることができるという万能武器である。もちろん球のまま投擲にも使えるし、遠隔操作も可能である。

対策法としては、まずは友好的な態度をとろう。刺激したら速攻戦闘モードに入るからである。敵に回すのは危険である。肉片さえ残してもらえないかもしれない。まあ、弱いもの苛めはしないだろうが…。

ここで万年筆を止めた。仲間についての書物を書こうとしただけだからな。自分のプロフィールなんて書くのもどうかと思うしな。でも、なんか寂しいよな。やっぱり、自画自賛も甚だしいが、自分のプロフィールを書くことにする。若干恥ずかしいが仕方がない。これは私の宝物にする予定だからな。

名前：宇都宮シキ（うつのみやしき）

性別：女

能力：獣化
ナノブラスト

武器：近接武器ならなんでも。

特技：武術全般

趣味：ゲーム関係

好き：夜哉

嫌い：大神

危険度：

友好度：

概要：この書物を書いている当人。最後のヒロイン。

社交的でどんな人にも友好的な態度をとるが、内に秘めた獣の闘争心は拭いされない。ビーストという種族で、特殊能力としてナノブラストが行うことができる。容姿は、黒の長髪で白の大きな帽子を被っている。耳は所謂獣耳で垂れている。そして、瞳は真紅だ。

外見年齢は18歳。胸は穹に次ぐ。

武器は全て使用可能で、特に二刀流、槍、二爪をよく使用する。

レベル的にはかなりの使い手でも軽くあしらうことができる程度。

腕力には自信あり。

夜哉に惚れていて、一緒にゲームはするが、思いは伝えきれなくて悪戦苦闘中。というか早く気づけバカ。

対策法としては、取り敢えず友好的なのでじゃんじゃん友達になってもいっこうに構わない。

よくゲームセンターで格闘ゲームをするので、乱入してみよう。数秒で倒されます↑自分で書いて恥ずかしくなった

「ふうー、なかなか疲れるなこれ。」

自分のプロフィールはやたら短くなった気がするが気にしてはいけない。恥ずかしいのだ。

万年筆はもう片付けて、この書物のタイトルを毛筆で書くことにした。

水を注ぎ、墨をする夜の1時。

「よし、書くか。」

心頭を滅却して一文字目に気合いをいれる。

静かな筆の音が響く。

ただ、さらさらとさらさらと流れるようなリズムに乗って。
そして出来た文字は。

【夢幻史記】

キャラクター紹介（後書き）

さて、プロフィールも終わり、本編に入ります。
前に言ったコラボは次の一話からです。

鏡の中の仮面戦士（前書き）

取り敢えず一話完結。というか、コラボ作品ですの。
オンドウル様、ありがとございました（＾－＾）／

鏡の中の仮面戦士

朝儀 side

鏡が突然割れた。気味が悪いから調べてほしい。

これが私とシャルに来た依頼。正直、調べようが無いって事だけが確かである。

霊の類いかとたかをくくっていたものの、霊的反応はないし、別に問題はなさそうなんだけど…。依頼人がいつていた中から影が見えて、人を拐っていったという本当かどうか定かでない情報が何やら引つ掛かる。というか、魔術の類いではなく鏡の中に移動できる手段があるとすればそれはそれで問題であるのだ。

「はー、手も足も出ないね…。こちらら雲を掴むような…。」

「でも、やっぱり何か引つ掛かりますよね…。なんかありそうで…。」

シャルとは全くの同意見である。なんかありそうでないなんて気もしてきた…。

「あー！！何にも解んないー！！」

「落ち着いて下さい朝儀。冷静にならないと解るものもわかりません。」

そういうシャルも、苛立ちを隠しきれてない。そう、先ほどから魔方陣を展開して複雑な解析をしているのに何もわからないのだ。

「……うー、わかってるよう…。しかし、魔力が働いてないとするとこちとらお手上げじゃ……。」

一瞬、鏡の中に黒い影が見えた。シャルも同様に何かを見つけたようだ。

補足だが、壊れた鏡は元通りに修復している。

「今の…。」

「ええ、確実に何か居ますね。」

その瞬間、鏡の中から触手が現れ…。

「なんでさつつつ!?!」

私は鏡の中に引きずり込まれていった。

「朝儀!?!」

シャルはそこに取り残された。

私は、体制を崩して上手く攻撃体制に入っていない。さらに…。

「し……触手きもい……。」

触手は超苦手である。それが手足を絡めとっていると思うと…。

「うつ……うつ……ぬるぬるする……もう無理。」

抵抗する精神力もなくした。

「うおおおお!!」

私を束縛していた触手がほどけていく。男の声がした方を向くと、全身装甲の男が二人、剣を持っている。

「うげー、キモかった…って、来んなっ!!」

右手を出して、全力の火球を放った。

怪物…タコ?はうめき声をあげながら悶え苦しむ。

だんだんと楽しくなってきた。手加減して火力を調整。

因みに全身装甲のナイスガイは後ろで啞然としている。

「は……ははっ…あはははっ!!」

後ろにいるナイスガイたちも、この期を逃すまいと必殺技を仕掛けることにしたようだ。

『FINAL VENT』

必殺のライダーキックが炸裂する。龍と同時に突進したそれは、怪物を一撃で破砕して爆散させるだけの威力を秘めていた。奇声をあげた触手はグツタリとして消滅していった。

「う…うえ…。ベトベトが若干付いたし…死にたい。」

ナイスガイ×2が駆け寄ってきた。一瞬で装甲を解除すると、赤い方は今時のツンツン頭をした男。もう片方は、ツンツンなのに変わ

りは無いが、黄色い民族衣装を着て、同じようなデザインのヘアバンドをつけている。なにやら説明しづらいが、とにかくなんかの民族だろう。

「お、おい。大丈夫か？」

「……ベトベト超キモい。泣きたい。」

私が涙眼で言っているのになぜ彼らは拳動不審なのだろうか……。ハシカチプリーズ。私の有るけどベトベトつきたくない。

すると、どこぞからもう一人走ってきた。そいつも全身装甲だったが、解除して男二人にならんだ。

黒の長髪で片眼に眼帯をしている。

というか、今さらだが何故私は理由なしにコイツらに気を許しているのか……。

ベトベトが付いた辺りは不快感抜群だが、幸いにも左腕だけだから心配ない。私はあくまでも自然体でどんな攻撃にも対応できるように構えている。

「はあ……はあ……。アレン、ユート。リア充を見つけたにしても、暴走しすぎだ。戻る方法は考えてあるのか？」

リア充？暴走？意味がわからない。取り敢えず警戒レベルを上げる。

「おねえさん、追いかけてきたのか？」

「当たり前だ！！それに、警戒されているではないか！」

「いや、俺たちは取り敢えず助けたつもりなんだけどな。」

半分呆れてきた。仕方がない、こちらから話しかけるか。

「見ず知らずの男に近寄られて警戒しない女はいない。名を名乗れよ。」

睨んだままトーンをおとして言う。

「ああ、それもそうか。てか、俺はこの状況で冷静でいられる人見たこと無いぞ。」

「うるさい。名乗らないなら殺す。」

殺気を充分だして完全警戒モードに入る。何かあれば瞬時に対応可能である。

「あ、ああわかったって。俺はアレン・クラウド。仮面ライダーラゴンナイトだよ。頼むから警戒を解いてくれ。」

ツンツン頭はアレン。

更に、後の二人も名乗った。民族衣装の少年はユート・ユン・ユンカースで、仮面ライダーストライク。黒髪の少女はナギサで仮面ライダーステイングというらしい。

「……私は秋吉朝儀。鏡が突然割れた、気味が悪いから調べて欲しいって依頼が来たから調べたらこのありさま。どう責任とってくれるわけ？ 気に入ってた服に粘液が付いたんだけど。とれないし。」

責任のとりようもないし、とる必要さえ疑わしいが、大嫌いな触手

+ 粘液に自制がつかないくらい軽くイライラとしている。

「いや、責任……つつてもな、……鏡の外に帰すくらいしか出来ないけど……。」

それはそうだろう。しかしやはり朝儀は苛立っていた。それにも苛立っていたし、一瞬胸を注視してナギサの胸を観た二人の男に苛立っていた。

「……。一回死ぬか？」

自分の胸を見下ろした。何のことはない。小高い丘などなかった。

「へ？」

自分に比べてナギサとやらは随分とまあ着痩せするタイプらしい。妬ましい。

「さつさとこつから出しなさい。話はそれから。」

「あ……ああ。……アレン、ユート。お前らなんか怒らせるようなことしたのか？」

ナギサのひそひそ話に二人は全力で首を横にふった。

鏡の世界から出た。
ペンダラムにうしろしめ

外で心配して待っていたシャルが駆け寄ってくる。

「あ、朝儀……大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「あー、別に怪我はしてないよ。……でも、死にたい。」

「え？……あー、ドンマイです……。」

まあ、先程までは強がってはいたのだが、限界。涙眼になってきた。

「朝儀、お気を確かに。あの方達は誰ですか？」

「……ふえ……変態。」

「違い！！」

「否定するなら胸を見るのを止めてもらえませんか。風穴をぶち抜きますよ？」

表情と口調は穏やかなのに急に寒くなったのは、シャルが出したアサルトライフルのせいだろう。

「おいおいおい。待て待て待て待て！！俺たちは何も！」

次の瞬間、ユートが爆弾を投下した。

「大丈夫だ朝儀！！貧乳が好きな人も居るんだぞ！！」

「……あ……」

「ああ？」

ゆらりと朝儀が立ち上がった。いつのまにか粘液は消散しているが、体を通してでる力が見えるようだ。

完全戦闘モードに移行した。誰も彼女を止められない。

「バカユートオオオオオオ!!」

朝儀の右手の中には紅球が収められていた。グニヤリと形状が変化、ナツクルに変化した。

「殺戮開始。」

「自業自得ですね。仕方ないです。」

アレンが悲壮感たっぷりにカードデッキをかざすと、変身ベルトが形成される。カードデッキを変身ベルトに装着。そして。

「KAMEN RIDER!!」

仮面ライダードラゴンナイトに変身した。

隣でユートも仮面ライダーストライクに変身。

ナギサは、渋々というふうに仮面ライダーステイングに変身した。

地面を蹴って、朝儀がまず獲物にしたのは仮面ライダーストライク。重力も操り、最速の拳はベノサーベルに受け止められたが、そこから蹴りに派生する。

「ぐあっ!!」

怪力にストライクは吹き飛ばされ、近くにあった倉庫に叩きつけられる。

が、後ろからドラゴンナイトが、ドラグソードで突っ込んでくる。

しかしナツクルが同程度の早さかつそれ以上の早さで迎撃し、弾き防御^{バリイ}をする。

さらに、蹴りを入れようとして、背中に衝撃が走る。スティングのアタックベントだ。

エビルダイバーというエイの形状をしたアドベントビーストが背中に突っ込んできたのだ。

「ちっ…ちょこまかと…。」

更に、振り向くとドラゴンナイトがドラグソードを振りかざしている受け身の取りようがない…。

爆音が鳴り響くと同時にドラゴンナイトの手からドラグソードがなくなっていた。500m離れた場所からアサルトライフルを構えたシャルを視認。

「いい仕事…。」

二人を蹴り飛ばそうとしたそのときだった。

攻撃が止められた。

向こうもストライクのベノサーベルが片手剣と鏢迫り合っている。

私の蹴りは光輝く籠手が受け止めていた。

「なーにがいい仕事なんだ。嫌な予感がして来てみれば…。ふぁー、眠い。」

赤色のパーカーで深々と被るフード。紅の片手剣に白銀の籠手。ここまで来たら誰かは特定できるだろう。

「夜……。」

夜哉 side

「で、二人とも退いてもらえないと俺はずっとこの体制なんだけど？」

右手で朝の蹴りを受け止めて左手の赤桜・弐式で変な装甲の剣を受け止めている。まあ、俗に言う仮面ライダーって奴で間違いないよな。俺も子供の頃見たぜ。

んで、右手がすっげー痛い。こいつ本気で蹴りやがったからな。正直右手がもげるかと思ったぜ。

それと、問題なのが何故俺が朝に視線を向けないかだが…。朝はミニスカートを今穿いてんの。あとは想像にまかせます。

「えっ！？あつ…よ…夜！？どつ…どつ…。」

よし落ち着こう。謎言語を紐解くにはまずは落ち着きが重要だ。

「おいおい落ち着け、それと足降ろせ。」

「え？あ…はう…。」

「で、あんたらは何者だ？鏡を割りまくるテロリスト？はた迷惑だな。割れたのが一枚で済んだ幸運。」

「ああ、すまない。戦わずにすむならそれで良いんだ。」

変身をといた黒髪の少女が言った。

「そりゃいいや、なら状況説明頼むわ。」

「なるほど、その男二人の暴走が原因というわけか。リア充がどうとかっつーのは置いといてだ。」

コホンと一つ咳払い。

「あんたら、グラールに帰れんの？」

グラールという太陽系については、シキや咲魔、シャルが以前住んでいたと聞いていたし、文明とかも聞いていたからなんとなく理解できるが…。

まあ、ベンダラっつー鏡の世界を通って来たんだからそこを通ればいいんだろうが。

「ああ、アレンとユートを引っ張って行けばなんとかなるだろう。」

「そっか。なら、安心だな。」

「すまないな。迷惑をかけて。」

「いってことよ。んじゃ、またな。」

またな。というのは、いつかこちらからグラールに行ってやろうと思う。咲魔達のもう一つの故郷だからな。

「ああ、本当にすまなかった。」

ナギサは、二人を引っ張ってグラールに帰っていった。そして、鏡に入る際に。鏡が粉々に砕け散った。

「あ、そゆこと。」

「ここまで粉々だと…修復不可能ですね…。」

新しい鏡は自前だった。

鏡の中の仮面戦士（後書き）

一話完結って以外と悪くないですね。
話が始まるまでこれでいいかな…（・ω・）

暇をもて余した神々の天地創造（前書き）

はいミジケー（´・ω・｀）

初めての一次だからこういうこともあるww

暇をもて余した神々の天地創造

大神 side

「うむう…最近面白くないのう…。」

大神は、机の上のパソコンで神々の集会の為の書類作成をしていた。慣れた手つきのブラインドタッチである。まあ、これは大神が暇を埋めるためにインターネットに繋いで Twitter をしていたら勝手に打てるようになったのだが。

「それにしても…まさかバレてしまうとはのう…。」

民間人を勝手に神の意思で形だけでも操作するのは問題である。神は思い通りの世界を創るのではなく、世界を創る人々や動物達などを見守る存在なのだ。

それなのに、大神の一柱であるにもかかわらず、人を操作していたのだ。運良く最高神は赦したが、あってはならない事である。

「パソコンは眼が疲れるのじゃー。」

意味もなく伸ばした足をバタバタとさせる。

外見が完璧な銀髪ロリータなので、見るものによってはお持ち帰りレベルの可愛さであるのだが。

「大神様、ホットココアをご用意致しました。」

「すまんのう。ときに神ちゃん、天地創造って憧れるよね。」

「はあ。」

うーむ、と右手でパソコンを打ち、左手でココアを飲みながらウンと唸る。

「しかし、天地創造するには明確な理由はあるのですか？」

素朴な神の疑問である。

「ないのう。」

即答した。速答である。

ついだが、この大神は他の神々よりも力が強く、やる気になれば天地創造など容易い。

しかし、無断で天地創造をしたら…。

「最高神^{ババ}に叱られるのう…。」

そうは言っても、何かと最高神は愛娘である大神に甘い。甘ったるい。今川焼のカスタードクリームよりも甘い。俗に言う親バカである。多分そこまで悪いことではないので大神のする天地創造も笑って流すだろうと神は予想した。

「神ちゃん。我は暇なのだよ。」

「暇…ですか。」

「うむ。いくら不老不死とはいえ、人生に潤いがないと精神は死ん

でいくのじゃよ。」

因みに大神は十世紀近く生きている。

「足でDDRをしながら書類作成をしている大神様は暇であると仰るのですか。」

「よっしゃフルコン。」

大神は澄ました顔でゲームを続けている。
机の足元には専用のコントローラが置かれているのだ。

「大神様、百年も部屋に籠っていると最高神様もご心配になられますよ。」

「パパは心配性じゃのう。仕方あるまいて。今日は久し振りにドッジボールチームに混ざろうかの。」

「あ、私今日はドッジボール休むことにしました。」

天界のサークルみたいなものだ。ドッジボールといえば二世紀程前、大神と最高神が参加したときに、ボールのあまりのパワーに他の神々の負傷者が続出したという伝説は今もなお語り継がれていて、記憶に新しいのだ。

「神ちゃん来ないのかの…。むうー、じゃあ外出はやめじゃの。」

ぐでーと頂垂れたままパソコンをカタカタと打つ大神。頃合いと思い、退出しようとしたそのときだった。

神ちゃん（中間管理職の八百万神）は宙を舞った。

「きゃああああっ!？」

「神ちゃん!?!?。」

ドアを思いつきり蹴飛ばして開けたのは銀髪イケメンである。神ちゃんに悪びれる風もなく「悪い。」という、大神に向き直った。

「あ…あーゆーパパ？」

その瞬間、イケメンパパの顔が慈愛に満ちた聖母のような微笑みを浮かべたが、同時に駄目パパである事実が娘である大神に再びふりかかった。

「愛しの俺の娘よっ!！」

抱擁（と言う名のボディタックル）が届く前に顔面に蹴りを入れた。

「パパ…自重せぬか…。」

「おうふ…これが巷で噂のスキンシップとやらか我が娘よ!！」

神ちゃんはドアにぶつけて赤くなった顔をさすりながら心の中で「全然噂になってね!。」とツツコンだ。

「そんなもな噂になんておらん!!それにスキンシップでないぞ!」

後ろに回ったパパは、大神の胸を触った。

「おーう、我が娘よ。胸は然程成長してないようだな。だがそれが
イイツー!!」

「こんの……。」

神ちゃんはヤバイと思った。しかし、時すでに遅し。必要最低限の
防護結界を部屋の物に張った。

「エロ親父!!」

大神の周りに火柱が立つ。地鳴りが響いて、部屋に反響する。さら
に部屋の壁は吹き飛ばされ、外から凄惨な光景が丸見えになる。
自重しないパパラッチ天使は火柱に巻き込まれて撃墜された。

「ふう、我が娘よ。俺はそんなんでも傷一つかんぞ。お前の大好
きな神ちゃんはどうか知らんけどな。」

「だ…大好きとかじゃねーし!!胸触んなし!超キモいし!」

「き…キモ……orz」

イケメンで通っていた最高神は、娘に放たれたキモいしの一撃に撃
沈した。

「最高神様…お気を確かに。大神様も内心は貴方の事が好きなん
ですよ。きつと。」

耳打ちをすると。最高神は復活した。

「う…うわ。いきなり復活したのじゃ…。」

コホンと一つ咳払い。最高神は本題に移った。

「俺は天地創造をしようと思ってるのだが、我が娘である大神に助言を求めようと思ってな。」

「パパ、それなら別次元を用意するのがよいぞ。」

期待していた話題がいきなりふりかかり、大神はニヤリとして言った。

「何故？」

「面白いからじゃよ。パパはもう我が操作していた人間を知ってるな？」

「うむ。」

大神はニヤニヤしながら引き出しの中から一束の書類を取り出した。

「私のINSANITY計画じゃよ。どうじゃ？イカすじゃろ？」

書類を受けとると、最高神は口許をニヤリと歪めた。

「最高だ、流石我が娘。この計画は面白い。では始めるか『神遊び』の始まりだ！！」

暇をもて余した神々の天地創造（後書き）

いっつも悩み所ですよ、後書きつて。（´・ω・｀）

えっと、大神のスペックは咲魔を軽く凌駕しますね。
神様公式チートwww

東大陸と西大陸と転送と（前書き）

さてさて、いまいち魔装探偵と関係なくなりましたね…。ならば二期を作らないとな…。まあ、先の話ですがね。

東大陸と西大陸と転送と

??? side

真っ赤な絨毯、純白のタイル。整地された空間。お城である。夢の中、ファンタジー、はたまた伝説に出てきそうな古典的で中性的かつ洋風なお城は異質な雰囲気を纏っていた。

奥に鎮座している巨大な試験管が主に異質な雰囲気を放っているが、その試験管を取り囲むようにして黒ローブを羽織っている者達も更に異質な雰囲気を漂わせている。

発される言葉は独自の語であろうか。淡々と延々と発される言葉は何かの呪文のように感情が込められているとは到底思えないであろう。事実、この者達は感情を込めてなどいない。

「主よ！！我ら召喚士ここに在らん。汝、あらゆるものを破壊せし力で破滅の天秤を傾けよ！！」

真ん中にたっていた男の声が反響する。

ゴポゴポ…と試験管に音が鳴る。試験管の液に満たされた中に居るのは少女。

金の長髪を水中でたなびかせている。未だ目は開かれていない。白の肌は全てのものを鏡のように映し出すかのようなのである。

「美しい…。これが稀代の吸血鬼…。」

「魔力も相当なものだ…。これ一つあれば西大陸なぞ一捻りだ。」

「当たり前よ。これは何せ最強のモノであるからな。使役できれば。」

モノ扱いとは滑稽である。やはり、頼るなら其なりに崇められてもいいものである。しかし吸血鬼。吸血鬼を復活させようとしているのである。吸血鬼とはいつの時代も忌み嫌われて止まない存在である。それは仕方ないことでもあるのだ。

「仕上げだ。」

超巨大な魔方陣が展開される。先ほどの男がまた詠唱を開始。それは先ほどの無味乾燥したうわ言のような呪文ではなく、詠うような澄んだ声である。

「汝、再びこの世界を血で満たすもの。目覚めよ吸血鬼、ありとあらゆる血を吸い、大地を駆け、血が溢れているこの世界に君臨したまへ…。」

言語はその国独自のものであるが、翻訳したらこうなるのである。

瞬間、試験管が盛大に爆発した。

「うにゅ…ふあああ。」

謎言語を放つ裸体の金髪吸血鬼。男なら変な妄想をしまいそうな格好であるが、生憎召喚士達は毎日コレを見てきたのでさほど気にしてはいなかった。

「うわー、なにこれー。全身にヌルヌルした液体ー。なんか淫乱ー。」

一人の男がタオルと服を持ってきた。嬉々として吸血鬼はそれを受けとる。

「わー可愛い服ー。あ…。」

次の言葉を発した瞬間、召喚士達は己の身の危険を改めて知ることになった。

「ねえ、血が渴いた。飲みたい。」

だが、犠牲者は幸い出なかった。こんなこともあるのかと血液バンクから輸血用の血液は獲得済みである。

「あ、いーねこれ！！飲みやすいし！！」

ジューズ感覚でチューチュー血を飲む吸血鬼に召喚士達は内心ホツとした。

でも、服を着てから飲んでほしいものである。

「では、吸血鬼様。王の謁見がございますので。」

「あ、うん。それと名前あるんだけど…ちゃんと。」

吸血鬼は得意気に自らの名を名乗った。

「黎・ユーデリカ^{れい}って、ちゃんと名前があるんだから！」

「では、黎・ユーデリカ様。こちらへ。」

「うん!!」

血液パックをストローで吸いながら吸血鬼は召喚士についていく。外見だけ見れば、只の可愛らしい金髪の少女であるが、その魔力量をわずかながら探った召喚士は確信した。

——これでやっと戦争が終結すると…。

場所は変わって西大陸。

東大陸が絶対王政であるのに対して、西大陸は民主主義の国が多い。だが、中心国である『ソルティー』だけ王政である。しかし、絶対王政というわけではなく、市民の意見を積極的に取り入れ、議論しているのである。

ソルティーの城下町に住んでいる『アルト・オディナ』という少年の話である。

アルトside

アルト・オディナは剣術に秀でていた。それも、けた外れの才能があり、東西戦争に駆り立てられるのも時間の問題であった。そして今日、17歳の誕生日の朝収集がかかったのである。

「アルト…。本当に、いくのかい？」

母親が弱々しい声で聞いた。

しかしアルトの決断は変わらない。

「ごめんよお母さん。でも、ちゃんと戻ってくるから。」

先程の、「収集がかかった」というのはいささか語弊を招く。アルト自身が志願したのである。

別に、アルトのような市民が行かなくても、西大陸には伝統的な『ホムンクルス製造』の秘術があるので無限に兵士がつかれるからいいのだが、如何せんホムンクルスは人間に劣るのだ。

東西戦争は負けるわけにはいかないのだ。負ければ敵国に服従しなければならぬ。敵国への服従と、絶対王政はイコールで結ばれる関係にあるのだ。

「本当かい？本当に、三年間働いたら戻ってくるんだね？」

アルトは、母親に笑顔で応えた。

「大丈夫だよお母さん。僕は死なない。そのための武道と魔術だろう？」

アルトは、魔術でも優秀な成績をとっていた。

彼が得意とする魔術は主に炎属性。火球から爆発まで幅広くつかえ、上手くなれば戦車にも太刀打ちできるのだ。

「そう…いつでも戻ってらっしゃい。アルト。」

とびっきりの笑顔を母親に向ける。

「まかしといて！！んじゃ、またいつか！」

少年は戦争という終わらない混迷の渦に巻き込まれていったのだ。

黎side

さらに場所は変わって東大陸の中心国『プルト』にある巨大な古城。そこには大陸の最高権力者、『王』が玉座に構えていた。

「ねー、戦争って何ー？」

吸血鬼は戦争を知らない。人間達の営みを知る由もないのである。

「簡単には殺戮です。敵の国の人造人間を殺せばいいのです。……人造人間と人間の区別は見たらわかります。」

「へー！！面白そうだね。時に召喚士さん、血液型何型？」

「Aでございます。」

「Aかー。Bの血は美味しいのにAはなんか微妙なんだよねー。つまんない。」

しばらく歩くと玉座に到着した。これで吸血鬼は戦争に赴くことになる。

召喚士は、吸血鬼が王に謁見されてるのに付き添いながら、既に東大陸の勝利を信じて疑わなかった。

夜哉side

朝日が立ち上る。新しい一日の始まりである。今日はやけに清々し

いし、目覚めもよい。絶好調な一日であろつ。

ゴンゴン！！ゴンゴン！！

いきなり。いきなりである。激しくドアをノックする音。昨日はクリスマスで、皆酒を飲んで俺の家に泊まっていった…というか寝ただけなのだが。というわけで、全員リビングで寝ているのだが、今のノックで叩き起こされた。

絶好調な一日というのは訂正。最悪な一日の始まりであつた。

尚も鳴り響く不快なノック音。堪らず俺はドアを開いた。

「んだよコラ。」

不快感100%の顔でドアを蹴り開けた。

「ああ？貴様口の聞き方がわからない用だな？国直属の徴税だコラ。」

ああ、そうだ。ここは日本ではない。所謂、俺たちは揃いも揃って新しい世界に転送されたのだ。お陰で俺は神様つつー存在を信じないといけなくなったし、神様が一層嫌いになった。

「…ここ東大陸ですらねーし。国もクソもねーよハゲ。」

あろつことが大神は、東大陸の最西端の1メートル西の所のあばら家に転送しやがったんだ。内装だけは元部屋と変わらないがな。

「ここは東大陸つつてんだろつが！！さっさと金出せや！女が男

か訳わかんねえ顔しやがって！」

「ああ？そんなに殺されたいか…。」

次の瞬間には徴税兵は頭から地面に突っ込んだ。秘技・犬神家である…ネタだがな。

取り敢えず放置することにした。

「あー、咲魔。西大陸に行かねえ？俺、絶対王政とか無理。」

「最初からそのつもりよ。」

「私も賛成だね。シャルは既に荷物まとめ始めてるし。」

「早いな…。移動手段どうすっかな…。」

「ジープでも創るわよ。」

つつわけで移動手段決定。いやあ、一家に一人は欲しいね。

「夜くん！！おっはよー！！」

今の今まで寝ていた穹であるが、…寝起きからこのテンションはど
うかしてるよな…。

「ちよっ…胸当たってるし。」

「いゃん。夜君のエッチ。」

俺は悪くない。

「穹、さっさと夜哉から離れなさい。」

朝は寝起きは低血圧である。寝起きはかなり気性が荒いし、牛乳を一パック飲み干す。経済的にあまり宜しくない。その朝だが、何故か後ろに真っ黒なオーラが…てか、

「ちよつ、朝あ！なぜ紅球を出してる！？」

「死なばもろとも。」

「殺す気満々！？」

つ…駄目だ！！俺はツッコミ役じゃねえ。ツッコミ役はシャルだろ
う！

「あはー。もしかして朝儀んは朝から夜君とエッチしたいのかな？」

「ち…違う！」

「ほらー、なにやってんだ？さっさと荷物まとめるよー！」

シキの声で一段落。ナイスカットお！！

まあ、荷物まとめるつつつても、携帯式の空間拡張デバイス『ナノトランサー』があるから荷物は常備品のケータイくらいだからな。なんて身軽な俺。

てか、俺だけじゃなくて、皆身軽だよな。

「よし、準備は完璧だな。」

「進路は西。しばらくは平原だからそれまでは私が運転するわよ。」

「おう。頼んだぜ咲魔。」

俺たちは西を目指して行った。

東大陸と西大陸と転送と（後書き）

【黎・ユーデリカ】Twitterで名前を募集しました！！

吸血鬼なのに東洋の漢字というワケわからないですなw

アルト・オディナ君！！珍しく男！！目立たせないと女子が多すぎるから… バランス調整員ですね

転生（前書き）

キャラ創りすぎた感満載WW

転生

「やっぱよー。」

高校の帰り道である。

俺こと蝶野逸人^{ちやつのいつと}はダチの宗要^{そうがなめ}と部活帰りである。因みに俺は卓球部で奴はバスケット部である。

「なんじゃ？」

気にしないが、要のしゃべり方は結構独特で古典的？である。多分初対面ではかなりビビるだろうな。まあ、ガキのころから腐れ縁なんだが。

「金髪ロリ巨乳だろう。」

「いいや、黒髪ロリペチャパイじゃろ。」

いきなりの変態発言にも対応できる良き友である。だが、趣味があわぬ…ぐぬぬ…ペチャパイのどこが良いのだ…。

「んだよー。巨乳だろうがー。」

「逸人はデカイだけならなんでもいいのじゃろ。」

「なにをー！要だって小さければなんでも良いんだろ。」

と、毎日がみ合いは続いている。

「あー、ガチモンの金髪ロリ巨乳に会いてえよな…。」

「まあ、無理じゃろな。金髪ロリはおつても巨乳がおらんからの。」

「問題点。あー、クリスマスなんだしよ、サンタの旦那はテンプレとかくれたらいいのにな…。」

「うむ、そこは逸人と同意見じゃが…ハードなのは無理じゃな。」

「わかってないな要。あれだ、神様はきっとチート能力をくれるはず。そして神様は金髪ロリ巨乳のはず。」

「またわけわからん妄想を…。」

さて、問題は帰り道で高層ビルの真下を通りかかった時だった。逸人に悪寒が走った。何かがヤバいと。おおむねその予感の結果的には当たっていた。

「要…!」

「んのわっ!?!」

逸人は要にタツクルをした。二人で転げたが、そこにはクレーンから落ちた鉄筋が落ちてきたのだ。

「は…はは……なんだよ…。」

「逸人…さんきゅの。」

だが、終わっていないかった。

暴走した5tトラックが、一命をとりとめた二人に猛スピードで突っ込んできたのだ。

「要…無理だ。」

「逸人！！しっかりするんじゃ！！」

抵抗はむなしく、暴走したトラックは二人に直撃して、二人は死んだ。

その頃の世界。

大神side

「あ、ミスった。」

「…こんどはなんですか、大神様…。」

「書類間違えて人間二人殺しちゃったのじゃ。テヘペロ。」

「……どうするおつもりで…。」

「神ちゃんよろしく！！」

「ですよねーorz」

ミスったと言うものの、実はこれはミスった訳じゃなく、故意にやったのだ。

かなり大きな魂の力を持っている二人を新世界に送りつけるためにボードゲーム『INSANITY』で最高神率いる東側陣営に勝つ

ために魂の格が強い人間が二人必要であるのだ。

最高神が召喚した吸血鬼は、今の自分の駒では倒せないのである。
咲魔一行を東側陣営の近くに落とした理由でもあるのだ。

「パパの神通力には勝てぬからの…。駒は揃えておく必要があるのじゃよ…。」

「なにか言われましたか？」

「なんでもない。あの二人はちゃんと西側陣営に落としといてよいぞ。」

「わかりました。」

夜哉 side

「おい、なんか気配。」

深夜であるので、起きているのは俺と見張り役のシャルだけである。

「なんでしょうか…とてつもない魔力…。」

シャルも感づいたようで、愛銃を持って何時でも戦闘できる準備をした。

見えるのは砂煙を巻き上げながら走る…人間？
東大陸から来てやがる…。

「起きろ、みんな!!！」

一瞬で全員起き上がった。朝も、とてつもない魔力を感じて無理やり低血圧を治した。

砂煙はスピードを保ったまま、ジープに突進する。

「させるかよ！！ヴィクトリウス！！」

「紅玉、大盾！！」

「アイアス！！」

シキ、朝儀、咲魔が最強の盾を展開する。

間もなく衝突。だが、拮抗は一秒としなかった。

ヴィクトリウスは砕け散り、紅玉はへこみ、アイアスの七つの花弁は無惨にも散った。

咲魔たちは、後方に大きく吹き飛ばされ、すぐ近くの岩壁に叩きつけられた。

「くっ…なんなんだ！！」

砂煙が晴れた所にいたのは少女。

金の長髪は風にたなびかせている。長いまつげに守られている瞳は大きく、金色である。ニコリと微笑みをみせるが、獰猛な犬歯は隠しきれていない。

服装は、黒のタンクトップに白のミニスカート、白と黒のボーダーのニーソックス。靴は茶色のブーツをはいている。

「これで三人つと。私はお兄さんの血が飲みたいな。お兄さんB型

でしょ？」

いつのまにかシャルも穹もその場に倒れていた。いつのまにか…である。明らかに俺たちより速いし強い…！だが、抵抗はくらいは…！

黒の瞳は元の赤に戻る。

赤桜・式式も右手一本で構える。

「きやがれ…。」

地面を蹴ったのは見えなかった。だが、右に飛んだのは間違っていた。俺の左に突風が吹いたのだ。地面に落としたピンを抜いた閃光弾は、突風に吹き飛ばされ、あらぬほうこうで爆発した。

だが、空中に居る俺はもはや受け身のしようがなく、吸血鬼に首を掴まれ、地面に叩きつけられた。

「ぐっ…うっ…。」

「お兄さん可愛いね。ふふっ…やっぱり生きの良いB型の血は最高だよね。」

瞬間、吸血鬼の背中ダイナマイトが炸裂する。

「融の最後っ屁だ…。」

「ふふっ。ちょっと驚いたな。でも、もう終わりだね、お兄さん。」

んどがホムンクルスである西側は志願兵が少なすぎて戦争なんかに行く物好きはかなり少数である。

「クレイク隊長…でしたっけ？」

「ふ、そうだ。戦場はシビアだぞ。生き抜く自信はあるか？ハンサムルーキー。」

「おうよ。てか、自信がなかったら志願なんてしねえし。」

「ほう、なかなか肝の座った新人だな。隊長に敬語を使わぬとはな。」

「

「あ、ああ。スミマセン生憎敬語の教養は受けてないんでな。」

クレイクはガハハと笑うと、右手に持ったらビールを飲み干して俺の背中をバシバシ叩いた。

「つてえな。」

「ふふふ…敬語の教養が無いときたか！！つくづく面白い新人だな！お前は。戦場での働き、期待しとるぞ。」

「へっ、任せときなよ隊長。」

ガシッと握手し、ニッと笑った。

逸人side

あ…あれ…確か俺は…。

そうだ、トラックに退かれて死んだんだ…となると、死後の世界か？やけに鮮明だな…。あーあ、生きてる間に金髪ロリ巨乳を拝んでおきたかったな…。

そういえば、要は…助かったのか？

「ん、んー。」

「要？」

「…い…逸人！？おぬし、生きとるのか！？」

「落ち着け。多分ここあれだ、死後の世界的なテンプレ的要素満載の世界だよメイビー。」

オーケー、俺も落ち着いた方が良さそうだ。死後の世界なんてそんな厨二てきな要素が在るわけ無い。

「その考えは概ね当たりです。」

なんか、奥から金髪の大人の姉さんが現れた。

巨乳である。巨乳なのだ。だがしかし、……。

「なぜにロリじゃない…。」

「ぶほっ！！おまつｗｗｗ」

要が笑い転げはじめた。

「ええと…。一応私はあなた方の言う神ですね。」

「だからなぜにロリじゃない？」

「逸人…おぬし、少しはその固定概念から離れぬか…。神様も困っておるぞ。」

いや…、可笑いぞ。俺の脳内神はいつなん時でも金髪ロリ巨乳だったはず…。何故に成長してみた！？お姉さん系なんか求めてねえよ！！ロリ出せやロリ！！

「あのー軽く傷つきますよ。私。」

「逸人、その声にだだもれの思考は止めるんじゃない。こっちまで恥ずかしい！」

コホンと咳払いを一つ、神様は閑話休題して本題に移る。

「まず、あなた方は死にました。」

「ナ、ナンダッテ。」「」

「……はあ。上からの命令であなた方を新しい世界に送るわけですが。」

「「テンプレ的要素k t k r！」」

「あの、対応に疲れるので止めてください。」

「あ…すまんの。」

「おい要！！俺たち神様を疲れさせたぞ！！勝ち組じゃね？」

「逸人、おぬしは自重せぬか。」

「だが断る。」

神様の顔に疲労の色が浮かぶ。うん、毎日疲れてるんだろうね。可哀想に。

「で、あなた達に能力を与えると…。」

「キタ——（・・）——！！！」

「泣いていいですか？」

神様…疲れてるんだろうな。仕方ないな。

「んじゃ、俺は…いや待て要。」

「なんじゃ？」

「こついででチート能力をもらうのは死亡フラグか絶望フラグだ。一生幸せになれねえ。二次創作の小説なんかそんなもんだ。」

「む？それがどうしたのじゃ？」

「だから敢えて俺は！」

さらさらさらと半紙に筆墨硯。

「どっから出したんじゃ…。」

書かれていた文字は…。

【チート＼（＾・＾）／】

「結局チートだろうがああああ!!」

「と言うわけで、俺に攻撃力チート、防御力チート、蘇生力チートとさらに剣術チートくだしあ。」

「わしは剣術ではなく拳術チートでお願いするの。」

「……能力が残ってますが…。」

「え？まじ？能力もくれんの？ヒヤッホイ!!んじゃ、武器作成下さい。」

「わしは能力は要らんの…。代わりにパーティーメンバー全回復魔術でもとっておくの。」

神様はそれを聞いてどっと疲れた顔をしたが、すぐさま戻した。

「では、有意義な異世界ライフを!!」

意識が落ちた

転生（後書き）

作者「はい、雑談コーナー!!」

わーパチパチ

アルト「未だにこの小説の意図がわからん。」

作者「てへっ ごめんね。今ん所別段意図なんて無いんだ」

咲魔「…黒鍵創造。神秘付加【約束された勝利の剣】」

作者「ちょwwwエクバとかwww」

アチャ「体は剣で出来ている…。」

作者「うはwww何故にエミヤン来てみたwww強制送還w」

エミヤンは退出しました。

異世界来ちまっただぜ〇） （〇（前書き）

あけおめー（*^^*）

えつとお、新年早々短めの文章で、さらに駄文なんですが愛敬してください！。

異世界来ちまったぜ〇()〇

逸人 side

「イヤッフウウウウ!!」

「ホピヤアアアア!?!」

はははっ!!マジわらっちまうぜ!!神様のやろー、俺たちのスポイント、空中にしゃがったんだwww

「死ねえ要!!スクリユードライバーアア!!」

「嫌じゃああああ!!」

きりもみ回転をしながら地面に突き刺さった。

あれだ、体制的には伝家の宝刀『犬神家』ってやつでさあ。

「うう…こ…怖かったのじゃあ…逸人…」

え?要?なにコイツ、こんなに可愛かったっけ?コイツ性別男だったよな?確かに可愛い部類の顔だったけど男だったよな?なんで俺はドキドキしてんだ?同姓だぞ?

「つと…ふう、異世界だな。」

「…わしのことには気にしておらぬようじゃな…。まあそうだとは思っておったかの。」

で…草原。まあ草原だよな。夜だけど。神様、俺たちにどの方角に行けと？

「い…逸人！！」

後ろを振り向いた要が叫んだ。

そこには、血だらけでぶっ倒れている男一名。

「息は…あるな。……って！！女の子居るじゃん！！要、さっさと回復！」

「そ…そうじゃな。は…初めてじゃから期待するでないぞ。」

要はちゃっつかし空色の短髪女の子から始めやがった…うほ、巨乳k
t k r…って不謹慎かい？

要が手をかざすと、ライムグリーンの透明な光が女の子を包んだ。
徐々に傷口が閉じていく…。
なんとまあ…始めてみるが、不可解なもんだよな…魔術ってよ。

「ん…。」

女の子は目を醒ましたようだ。目を開けてみれば…なんとまあ鮮やかなオレンジですね…人って赤色の眼ってならないんじゃないかなかった
っけ？生物学的に。

まー、ファンタジー？の生き物ってことでおk？

「くっ…アンタ達！！」

巨乳のねーさんはバックステップをして、ファイティングポーズ？

「っ……？ちよつちまつたあ……！」

マズイ……この殺気は本物だ……やべえって……！！

「うっ……ゴホッ……。」

「……要。」

「わかっておる。」

巨大な光の玉がゆっくりと女の子に近づいていく。まあ、得たいの知れないものに当たる道理はないわな……だから俺が……！！

「な……？速い……！！」

後ろに回って手足を拘束した。チートだからな、力技はお手のものってわけだ。ってかよ、このねーさん、弱ってるけど力やべえ……すっげえ怪力。

「放せっ……！！放しなさい……！！」

「ちよつ、まじ動かんでくれよ……！」

光の玉命中。まあ、いい感じに鳩が豆鉄砲食らったような顔してやがるぜ。

ってなわけで仕事終了。女の子は解放。でもまあ、立派な巨乳ですな……後ろからじゃなくて前から抱きつきたかったぜ。

「体が!？」

「おうおう、調子はどうだい？礼ならコイツに言ってくれよ。」

何だかんだでいつの間にか近くにいた金髪…金髪ロリ巨乳…だと!？

「あ…ありがとうございます。」

「う…うむ。」

「なに照れてやがる。」

ゴスつと鈍い音が響いた。

「い…痛いのが…。それにしても、こやつだけが何故か回復しないのじゃが…。」

指を指したのは先ほどの男。赤のパーカーにジーパンという服装。女みたいな容貌…え？可愛い。要とタイマン張れるくらい可愛いな男…だよな。俺はゲイでは断じて無い。金髪ロリ巨乳が目の前にいるから少々舞い上がってるだけだ…多分。ん？なんか…首筋に齒形が…。

穹さんとシャルロッテさん（先程和解した後自己紹介をした。）が他に吹っ飛ばされた仲間を担いできた。

「あ…あのう…夜哉の方は回復できないでしょうか…。」

背後から萌えボイスが聞こえたと思ったらシャルロッテさんか。

「駄目じゃの…。何故か。」

「なあ要、この齒形なんなんだろうな。」

「齒形？気づかんかったのう…。んー、吸血鬼？」

「はあ？吸血鬼なんてファンタジーなもん「居るよ。「穹さん？」

穹さん…なんか小難しい顔してるな…。んー、ある意味核心部だろうんだけど…触れるべきかね…。

「……………」

「ま…まあ、西大陸の最大勢力の『ソルティー』まであと少しですし。皆さんで担げばどうにかなりますよ…ね？」う…シャルロツテさんの上目遣い強烈過ぎる…。

「ま…まあそうですね。行きましょう。」

要が若干ジト眼で見ってくるが仕方ないと眼で返事をした。
だって仕方がない可愛いもを金髪だもん。
俺が男をおんぶすることになったが…まあ、シャルロツテさんの上目遣いが見れただけ儲けとしよう。

門には門番が居たが、俺たちの顔を見た瞬間門を開けてくれた。やっぱ神様の権限ってやつか。

中性的な街並み。レンガの家何かが多いな。市場には新鮮な果物が沢山売り出されている。

宿屋は苦もなく探すことができた。まあお金はシャルロツテさんが

所持していて、お言葉に甘えて奢ってもらうことになった。シャルロッテさん言うことには、「お金はたくさんありますので、気にしないでくださいね。逸人さんと要さんには命の恩がありますので。」だそうだ。やはりシャルロッテさんはいい人である。

で、今部屋に一人ポツンと居る。

要はシキさんと朝儀さんと咲魔さん（名前は二人から事前に聞いている。）の回復をさせないといけないらしいので、ここには居ない。

ふと、振り返ってみた。よくよく考えてみたら俺と要は一度死んでるんだよな…。今まではノリとテンションでテンプレったけど、まあ、異世界。現世に…帰りたいのかな…俺。確かに、現世は面白くもなんともない。もちろん金髪口リ巨乳だって架空の存在だし、チートもないけど、第一前提として、戦争もないし紛争もない『平和』というのがある。が、異世界はどうだろう。俺は二次創作のテンプレ小説なんか読んでたんだが、決まって『戦争』など、平和とは言えない。しかも、神様は身体能力チートは与えてくれていた。逆に考えてみよう。身体能力チートがなければ、俺は死んでしまってるかもしれない世界に放り込まれたのである。

俺にはそれに耐えるだけの精神力があるか。答えは否。人が死ぬのは見たくないし自分の命も大切である。

なら、慣れるしかない。自分の命を掛けた戦に勝つために慣れるしかない。現世では一度死んだ。ならば次の異世界では精一杯生きるしかない…。

剣術チートも、宝の持ち腐れにはいけないよな。

取り敢えず、竹刀を召喚する。初めての武器作成で戸惑ったが苦もなく召喚することができた。

素振り…するかねえ…。

俺は外に出た。

俺は外に出て、学校の武道の授業で習った剣道を思い出しながら素振りを繰り返す。黙々と、繰り返す。剣術チートのお陰か、授業でやっていたへなちょこ素振りとは違い、随分切れがあり、空気が斬れる音がする。

「やあっ!!」

ふう…。やはり感覚がいい。神様のお陰だよな…俺の努力じゃない。はー、俺って無様。

不意に、なんとも言えない悪寒を感じ、振り向き際に竹刀を構える。

「ハッハア!!」

「なっ…敵!？」

敵は真剣…くっ…竹刀じゃ。

敵の真剣での一撃を受けた竹刀は真っ二つに折れた。

「ヒュウ。いい反応じゃねえかよ余所者!! 知ってんだぜ、お前らが西大陸の人間じゃないってことはよっ!!」

「ちいっ!!」

太刀を召喚した。敵の剣筋はギリギリで体が反応して回避に成功したが、本能の赴くまま切り下ろした太刀での一撃は空を切った。

「だが、東の奴等でもねえな。」

くっ…やべえ…。ビビってやがるぜ俺。だから嫌なんだよ!!

敵の姿は、全身黒いローブで覆われて特徴がつかめない。

「そして、西大陸の仲間だったのも知ってたんだよ!!」

「じゃあなんで!!」

「小手調べに決まってるだろ!!」

かなり汚い言葉を発するが、かなり透き通った声である。イケボですな。

「あめえんだよ!!」

足払いをいきなりされ、体制を崩した。

俺は、泥の地面にうつぶせに倒れる形になって、首筋には剣が当てられている。

「言つとくがよ、こちら弱いやつには興味ねえぜ。傭兵とか、軍とかに入るんだったら精々修行しな。」

黒いローブの男は音もなく去っていった。

「なんだってんだよ…くそっ!!」

全くもって訳がわからない。なんで襲われたんだよ…俺。

一時間くらい経った後だろうか、要が俺を見つけたのは。要には事

情を話した。ああ…やっぱ情けねえな俺…。
今日は遅いし、寝る。

アルトside

つと、新人いびり終了ってやつだな。

自分の部屋に黒いローブを脱いで、武装も部屋の壁に掛けた。

「帰ってきたか。」

「んお？クレイク隊長つかあ。」

「はあ…眼を離れた隙になんとやら…面倒なジョーカーを引いたものだ…。で、どうだったんだ？」

「んー、俺の見た感じなんか変な感じっすねー。剣術はまあいいとして、覚悟がないっつーかあ…。」

クレイクは難しそうな顔をするアルトを見て疑問が頭を過った。

「ふむ、ではなぜ大神様はあの者達を召喚したのか…。」

「つてか、クレイク隊長。なんで勝手に俺の部屋入ってんすかあ？」

「いや、貴様は特別に俺と同室となっているのでな。」

ニヤリと笑うクレイク。そして盛大に嫌そうな顔をするアルト。

「うっそだろ…。」

「ガッハハハ。…俺だつて面倒なルーキーのお守りなんてしたくねえよ。」

「あー、俺だつてこんなハゲ…スキンヘッドのおっさんなんかと同室じゃなくて…可愛いこちゃんと一緒に良かったぜ…。」

ため息をはく二人。西側陣営軍の夜は長いのであった…。

異世界来ちまったぜ〇） （〇（後書き）

はい終わりー。なんかアルト君の人物像が崩れていく気がして気が
ありません（<ー>）

それでは皆さん、よいお年をーですよ。

番外：正月の話（前書き）

友達が沖縄に旅行に行つててその嫉妬心をモチベーションにした番外です。

もう正月関係無いし正月でもないwww

番外：正月の話

夜哉 side

俺たちは正月休暇に大神が現世に戻してくれたのを利用して、沖縄でバカンスに徹することになっていた。
メンバーは言わずともがな俺と咲魔とシキと朝とシャル。

「はー、沖縄ってあつたけーもんだな。」

薄手の長袖で十分な感じだな…。流石に東京とは比較できない。うむ、沖縄はいいところであるな。空気旨いし。
現在那覇市の空港である。というか、空港から出た辺りである。

「もー、夜哉ははしやぎすぎだよー。」

「そー言うシキだつてはしゃいでんじゃねーか。」

「えへへ。」

まあ、嬉しそうだから連れてきた身としては嬉しいものであるがな。それにしても、どーして…。

「俺にくつつくかね…。」

右腕咲魔とシキ、左腕穹と朝。シャルがこっそり俺のTシャツをつまんでる。

辺りのバカンスに来ている男達の視線が殺気を帯びている。俺の胃

痛なんて誰も気にしちやいないだろっな。

そしてその疑問は無視されたようだ。はあ…俺の誤解が増えていく一方だな。

「それに…胸が当たってんだがよ。」

「当ててんのよ。」

即答来ました速答です。

なぜ当てるなぜ。そんなことしたら周りに誤解が振り撒かれるだけだろう。

軽く自制しておかないと理性がぶっとんじまうよ。

「あは。じゃー夜君は今晚いただきます。」

「おめーは黙ってる痴女。」

「やん。夜君のいけずー。襲っちゃうからね!!」

本当にこいつはいつのまに痴女になったのか誰か知っていたら教えてほしいよ。はー、小さい頃は俺の後ろに付いて回るだけだったのによー。

「よ…夜哉は絶対私がっ… / /」

「ん？どうした咲魔。」

「っ…知らない!!」

おいおい、どゆこと？いきなり怒られたぞ俺。カルシウム足りてる？沖縄だから魚はいっぱいあるぞ。多分。

「それにしても、空気が美味しいですね。心が洗われるみたい…。」

「だろう？シャルはわかってるなー。だから俺は沖縄が好きなんだ。」

「んで…朝はどーして不機嫌なんだよ。まったく、楽しくなければ連れてきた意味がないのにな。」

「朝。あーさ。……朝儀！！」

「ふ…ふえ！？ど…どう！？」

三回呼んでやっと気づいた。なんだ？悩みでもあんのか…。

「どーしたよ。なんか、機嫌わりーのか？」

「い……いや…別に。」

「どうもねえならいいけど。なんかあつたら言えよ。」

「う…うん…！」

それだけ元気ありや十分か。

それからそれから腕に掴まった輩をほどいて、取り敢えずホテルに行く。

なぜかほどくときにかなり嫌な顔していたのは何故だろうな…わからない。

まあいいか。沖縄だからいい場所たくさんあるよなー。水族館だろー、万座毛だろー、海だろー。なんかたくさん行きたいところあるよなあ。まあ、準備周到なのか、女子グループが行き先を考えてくれたんだよな。

「おー、ここがホテルか…。初めてだな…。」

「え？まじ？」

シキが珍しいもんを見るような目で見た。

「まじまじ。てか、人間だったときはとっくに両親死んでたし、旅行なんかに行く金ねーよ。」

若干重苦しい雰囲気になりそうになるところを、閑話休題。シキが明るい話に転換させてくれた。マジ感謝。
で、ホテル。

「うおっ…。」

「て…ティン!？」

「「誰さ。」」

上からシキ、咲魔、俺と朝。

「シャル、言っておらんかったのか…まあいい。秋吉君とは初めましてになるのか。私はティン。まあ、ここでは日本名で名乗っているが、君達には関係なかるうな。」

固まる俺。クスクス笑うシャル。もう驚きを通り越して世間話に花を咲かせる一行。カオス過ぎるだろう。

まあ、カオスなのは今に始まったことではないのだけれど…。

要約して説明するならば、ティンさんは大神に日本に落とされたはいいが、お金がなく、傭兵になろうとも日本は平和すぎて職に困っていた所でアルバイトのチラシを見つけたらしい…いやいやいやいや！おかしいだろ！明らかにここ高級ホテルだよねえ！アルバイト？あんの？マジで！？

そんなこんなでフロントのティンさんに荷物を預けて、いざ観光…やな予感。

「ふわあ…ここ…ここが御菓子御殿…す、凄すぎです！！」

空気だったシャルが目を光らせて眺めているのは御菓子の数々。もちろん沖縄限定のスイーツである。

他の面々も夢中で試食に試食。もちろん俺も。

「お、旨いな。」

「じゃあ口移しで食べさせてあげるね夜君。」

じゃあの使い方を明らかに間違っている。

しかも頭の中が腐ってやがる。

「どうやら太平洋のと真ん中に投げ込まれたいようだな穹。」

「やん。夜君のいけずー。襲っちゃうからね。」

なんか聞いたことあるセリフだし頭が腐ってる。修復は不可能なのか。

「一回タンクトップ着て北極圏まで行ってこい。数秒もしたら凍ってその口が開かなくなるから。」

「やん。」

もうやだこの子。変態属性マツハで俺のSAN値が…。

まあいい。それにしても旨いぞこのお菓子。ひ…一箱くらいいつもの自分への感謝の気持ちとして…はい、自分で食べたいだけです。別にいいよな。旨いしお金あるし…。

手を伸ばす。

「「あ…。」」

どうやら朝も同じ思考に至ったようで俺とほぼ同時に手を伸ばしたところ、手が当たったのだ。何故そこで気まずい空気になるのかに疑問が残る。

「朝も欲しいのか？」

「…うん。」

「んじゃでかいの一個でいいな。どーせ皆食べるんだろっし。」

よし、買う口実ができたな。

そんなこんなでお菓子を大量に購入した一行は次の目的地へむかった。

「海だああああっ！！」

場所は万座毛。

断崖絶壁がかっこいいなおい。

「ちょ、はずいからやめろよう…。」

「いやあ、海に来るの久し振りだからさ。」

流石に自分でもテンションがおかしかったと思い自重。

「綺麗な海ね…。」

「そーだな。流石に綺麗でも海水だから飲めないがな。」

「あはは。夜哉ったらさつきから口に入れることばかり。……少しは色恋沙汰にも眼を向けて欲しいんだけど…。」

「ん？なんか言ったか？咲魔。」

「なんでもないわよ。」

うむ、なんでもない割には女性陣から非難の眼差しが注がれているのはなんですか…。不幸だ…。

不意に夜哉のケータイの着信音が鳴り響く。

「はあ？大神からあ？」

《大神》

《リア充加減に軽くイラツと来たので取り敢えずそちらに祖龍と名高いミラルーツを送っておいたぞ。》

え？ミラルーツ？モンハンの？まじ？

「いやいやいやいやおかしい。大神もついに頭がおかしくなったか。」

「最初からだわ。しかし、面倒ね。人払いだけは完璧なようだけど、逃げられないように結界を張ってあるわ。」

「えっと…面倒どころの問題なのでしょうか…。」

「頭腐ってるよな。」

「最初からだろ。」

「というわけで夜君は私が襲っちゃうよー!!」

「腐ってやがる。」

良識のあるシャルがハラハラしてるものの、他は気にする様子もな

く。朝は大神の頭が腐つてることを再認識し、シキがため息をはいた。若干一名その話と関係なくセクハラ紛いの発言をする女子に嘆息する。どうしてこうなった。

取り敢えず君達力オス過ぎるだろう。あ、俺もか。

黒雲が空を取り巻く。

次第に雨雲になり、雷雲になり、豪雨と落雷が鳴り響く。どんだけ！。

「これ、結界の外の人間気づかないんだよな。」

「そのよね。」

はー、バカンスに来たつもりが…。どーしてこうなるかね…。

右手に『全反射の籠手』を装備する。

これで全員武装完了である。

それと同時に、純白の祖龍。ミラボレアス亜種『ミラルーツ』が稲妻が迸る雷雲から姿を現した。

丁度シャルの魔弾ライフルの射程圏内に入り、音速を超える光の弾が祖龍にぶつかる。が、堅い鱗に覆われている祖龍は魔弾が通らないのである。

「げえ…魔弾効かねーのかよ。」

「夜君、出番みたいだよ。」

祖龍は首を上にした瞬間ふりおろし、口から巨大な光の球を惜し

み無くこちらに発射してきた。

「あー、やっぱり俺って壁なのね。」

前に出て、右手で光弾を受け止める。反射の籠手がきらびやかな光を放ち出す。

「…籠手だけじゃ反射不可能とか、どこのチート野郎ですかねコンチクショウ！」

能力を発動。ベクトルを反射に設定。

「お返しだ!!」

光の弾は祖龍にゆっくりと進んでいくがもちろんゆっくり過ぎて当たらない。

「ちよつ、肉質堅すぎだろコイツ!？」

「斬っても斬っても再生しやがるわ。」

近接格闘組は苦戦の模様。咲魔は『断ち切る』という概念武装の大鎌で攻撃しているため、ダメージは通っているようだが、シキはその限りではないようだ。

肉弾戦担当の穹はまあ、元々巨大モンスターではなく対人戦担当だからまったく役に立ってないがな。

朝は紅球を大盾に変化させたり球のままぶつけたりして近接格闘組のサポートをしているが決定打が打てていない。そして俺は。

「壁担当なのに変わりないんだよな…。」

祖龍のブレスを延々と弾きまくるだけ。

この場合ダメージディーラーはチマチマと与える咲魔と正確に眼球を狙撃し続けるシャルロッテである。

「じり貧かよ!!」

いつもならシキの突破力で前線を蹴散らしてるのがセオリーだがシキが止められるところも弱いのかよ。

てか俺のバカンス返せ。

こうしてる間にも祖龍のブレスが放たれるのだ。

「ちいつ!!反射!」

祖龍のブレスが止んだ。すると祖龍は少し距離を取り、天に向かつて吼えた。

「な…なんだあ?」

雷雲が集まってくる。

「夜哉!!避けて!」

咲魔の声に従い、右に大きく飛んだ。

直後、俺のいた所が白く光り、電圧恐らく100億V以上の雷が落ちた。

「い…言っておくが、アレの反射は不可能だぞ。」

次々と白く光り、雷が落ちていく。

「アイアスも無理があるわね…。」

「電圧…100億V超えました!!」

「雷ってレベルじゃないよな…。」

白い光りはシャルを狙った。

「きゃっ!!」

え…そんなベタベタな…。まさか、石に躓いて転んじやいました？
シャルロットさん…。

「んにやろう!!」

反射、ベクトル、脚力全開で飛び出した。稲妻はすぐそこに迫っている。

「届けっ!!」

間一髪、稲妻はシャルのライフルを破砕させただけでどちらも助かった。

「き…気を付けろよ。」

「は…はひい…。ありがとございました…。」

このとき、女子全員の嫉妬の視線がシャルに降り注いで、シャルが涙目になったのは内緒である。

丁度計ったように雷撃が止んだ。

「シャル、あいつ頭はどうだった？」

「え…あのう…。一度だけ誤射で顔に当たったんですが、明らかに体よりやわらかいみたいです。」

誤射とは珍しいが、行幸。

「シキ、ナノブラストで引き付けといてくれ！！咲魔も頼んだぜ！！」

「え？お…おい！！たく…暴走したらどうするんだか…。」

「死亡フラグを立てないでシキ。さつさとやんなさい！！」

シキは衝撃のナノブラストを発動。金色の体毛を纏ったキツネになる。

さらに、咲魔は無限の創造世界の武器を空間を歪めて次々と発射する。

「時間がない。いくぜ！！赤桜・弑式。双剣！！」

反射とベクトルの応用で空を飛ぶ。
まもなく祖龍の目の前に到着。

「なあ、知ってるか？最近気づいたんだがよ、ここいらって海の近くだから風が強いよな。風にも向きがあるし速度がある。それを反射しながらベクトル制御したらこんなことも出来るんだぜ。」

夜哉の周りから次々とカマイタチが祖龍を傷つけていく。

「やっぱりな。顔面はやわらかいか。」

双剣のラッシュとカマイタチは次々と祖龍の皮膚を剥いていき…。

「よう、やっと怪我しやがったな。」

祖龍の怪我をしたところを指で触り、回復を妨げる。

「んー、血の流れがあるな。俺はベクトルと反射を操る能力もちだが、血流を逆流させかつ血の分子一つ一つを反射させたらどうなるんだろうな。」

「うわ、えげつな…。」

朝がなんか言った気がしたが聞こえなかったことにしよう。

「おら、発動。」

祖龍は余りの痛みに絶叫。さらに体の節々から大量に出血する。

祖龍と呼ばれたモンスターは音もなく崩れ落ちた。

「欠点。全員の服に血糊がつく。」

俺は頂垂れた。

ふと思った。

【死亡フラグ】

「あれ、ナノブラストでこんなに長かったわけ？」

ドクン

「え？嘘…。」

ドクン…ドクン

「嫌な予感が…。」

ドクンドクンドクンドクンドクンドクン

「グアアアアアア！！」

「『『『嘘おおおおっ！？』『』『『

「死亡フラグってほんとにあるんだな…orz」

「四十秒…全員で止めるわよー！。」

ナノブラストの暴走。

衝撃のナノブラストと疾風のナノブラストの時ににおける特殊ナノブラストである。

衝撃も疾風もキツネ型の獣人状態になるのだが、衝撃は金色、疾風は銀色である。そして、暴走ナノブラストは漆黒である。

確かに強力なナノブラストではあるのだが、その状態では理性が吹き飛ぶ。

結果、無差別破壊を繰り返すようになる。

まあ、有効な時間は45秒であるので、その間防いでいれば被害は最小限に留まるが、宇都宮シキのナノブラスト暴走は天災に等しいレベルなのである。

「創造、『天の鎖・弑式』
エルキ・ドウ・セカンドタイプ

天の鎖・弑式。かの英雄王が好んで使った捕縛専用の鎖の改造版である。

それは、対象の神格が高いほど強度を高める。所謂神を捕縛するための鎖である。

両の腕と銅を固めるが、ギシギシと音をを立てている。

「くっ…もたない…。」

「グアアアアアア!!」

咆哮すら攻撃とみなされ、それは、近くで聴くと通常の人間なら鼓膜が破れ、心臓麻痺になり、死ぬ。

右手を前に出し、反射する。

「き…きつつう!!」

「くっ…夜君。幻術がきかないよう…。」

「大丈夫だ！！シキの気をそらすことができれば！」

「っ…限界…。」

パリン…と音を立てて天の鎖は砕け散った。

「朝！！」

「わかってるよ！」

瞬間紅玉が鎖になってがんじがらめにする。

あと25秒…魔力量の多い咲魔がやって15秒なら朝がやって12秒位か…ならば残り13秒か…13秒二人で…。

「くっ…、夜哉！！任せた！！」

魔力切れを起こした朝が横に飛ぶ。

「穹、行くぜ。」

「うん！！」

赤桜・式式を握る。通常状態の片手剣。

シキの爪が襲いかかる。パリイパリイパリイ。夜哉の剣が立て続けに襲いかかる爪から綺麗に自分も穹も護る。

「チエイサー!!」

穹はローリングソバットを放ち、攻撃して怯ませるのだ。

「いいぞ穹!!あと五秒!」

「わかったよ!」

正拳突き、ローリングソバット、アッパーカット。様々な技が炸裂する。

「終わりだ。」

百分の一秒刻みで正確にナノブラストが終了した。

「ん?着信?...大神か。なんだ?」

『ちっ...。ゴホン。ちと野暮用でな、バカンスはお預けじゃ。』

「はあ?」

『バカンスはお預けじゃ。』

途端、転送される。

正月早々最悪な一日になるのであった。

番外：正月の話（後書き）

あうー。やっと更新できたのだ…きついのだ…。

ゴホン

よし、気晴らしに新しい作品でも書こうかな。

↑死亡フラグ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1904z/>

I N S A N I T Y

2012年1月9日21時48分発行